Tokyo Mission Research Institute Newsletter

東京ミッション研究所ニュース

第 74 号
2012 年 5 月発行

〒189-8512 東村山市廻田町 1-30-1 東京聖書学院内
TEL/FAX 042-396-5597　郵便振替 00150-5-29091

「イエスの苦難と栄光の神学とその実践」

齋藤孝志　東京聖書学院名誉教授、厚木キリスト教会名誉牧師、
長谷聖書集会教会牧師、東京ミッション研究所副理事長

今日、日本も世界も大転換の真っ只中にあります。昨年 3 月 11 日、日本は東日本の大地震、巨大津波、福島原発事故という前代未聞の大災害に見舞われ、実に多くの人たちの生命が奪われました。残った被災者の方々は、今も耐え難い苦しみの中にあります。福島の原発事故は、広島の原子爆弾の三百倍の大きさであると新聞は報じていました。私は福島出身ですので非常に心が痛みます。福島、東日本、日本の将来はどうなるのだろうかと。それでなくても、デフレで苦しみ、1000 兆円にものぼる国の借金で苦しんでいるのに。

この三重の災害の経験を、堺屋太一氏は第三の敗戦の経験だと言います。日本人は第二次世界大戦の敗戦からも見事に立ち上がりました。東北の人々は忍耐強い人たちですから、この大試練に耐え抜いて立ち上がられることを、私は信じています。しかし、これは大変なことです。東日本大震災の被災者の方々だけでなく、日本人全体が、第三の敗戦といわれるこの大試練から立ち上がり、全く新しい日本──原発のない、大地震・巨大津波にも打ち勝つ──にするための解決法があるのでしょうか。

一時的には、ボランタリー精神で、被害を受けた人々を支援することが必要ですが、長続きする道があるのでしょうか。東日本だけでなく、日本全体が直面する第三の敗戦にも匹敵する大悲劇から立ち上がる道はあるのでしょうか。

それは「心の絆」の道だといえるでしょう。確かに、日本の社会の絆は緩み、破り去られてしまったかのように見えていましたが、この災害を通して、被災者の家族、被災者同志、被災者とボランティア、被災者と国民全体が強い「心の絆」で結ばれたことを実感しました。これを十分認識した上で、もっと強い、根本的、本質的、永続的な解決策はないものかと思い悩んでいた時に、イエスの十字架と復活からくる解決策をヨハネ 19 章 23－27 節に見出して、ナルホドとうならされました。

イエスが十字架にかけられて地獄の苦しみの中におられた時に、その下では、ローマ兵士が、剥ぎ取った上着を裂き、下着をくじで分けようとしていました。イエスの肉体的精神的苦しみはいかばかりだったでしょうか。イエスはこの苦難の中で神の輝くばかりの栄光を見ておられたのです。十字架の傍らにいる弟子（ヨハネ）を見て、母に「あなたの子です」と言い、弟子（ヨハネ）には、「あなたの母です」と言われました。弟子はこの時から母マリアを自分の家に引き取りました。

私は、これだと思いました。新しい日本が歩むべき道は。イエスは、断末魔の苦しみの中で、「キリストの体である新しい愛の共同体である教会」を新しく創造されたのです。十字架の苦しみによって創造され生み出された「愛の共同体である教会」は、「人の絆」を超えるものです。この道こそ、日本の教会が、東京ミッション研究所が歩むべき道なのです。

2012.2.26 TMRI冬季フォーラム

平和の共同体―その正義と福音

東方敬信 青山学院大学教授・日本基督教団教務教師

総合大学である青山学院大学の教員として、自分の夢は何だったのだろうか。わたしの一番の夢は、日本の教会を満員にしたい、無牧の教会をなんとかしたい、若い人の文化の中で本当にキリスト教の価値観が花咲いて欲しい、希望はそれしかない。そのような強い願いに収斂している。

わたしは青山学院大学総合文化政策学部の開設に携わり、「日本は経済大国ではなく文化大国へ向かっている。渋谷キャンパスからの発信は、おしゃれではなく、社会倫理である」と学部の設立を推進した。経済学部の中には経済倫理の科目があったが、青山学院というミッション系の総合大学である役割に鑑みて、キリスト教経済倫理というカリキュラムが通年科目で設置された。自由選択の専門科目であるため「せいぜい 20-30 人程度が受講するだろう」という予想に反して、100名を超える受講者があった。

当時は、雪印乳業の食中毒事件や、三菱トラックの前輪が外れ母子が死傷する事故もあり、企業の不祥事が問題となっていた。受講する学生になぜ聞きに来たのかアンケートをとったところ、「せっかくキリスト教大学だからキリスト教の基本的な考えの枠組みを理解したい」「社会に出ていく前に、働くことにどんな意味があるのか知りたい」「キリスト教的価値観で社会を見るとどうなるか興味がある」といった回答が大半を占めていた。学生はキリスト教の中にある普遍性に関心を寄せている。

わたしの講義で一番最初に学生に紹介する話題の中に、「たくさんのモノでなく、たくさんの愛で励まそう」という言葉が登場する。マザー・テレサの生き方と言葉であるが、一般の学生を多く引き付けている。

ミッション系の青山学院大学といえども、キリスト者の割合は1％である。だがそれだけに、一般の日本人の学生がどのようにキリスト教と向き合うのかということが明確に問われる現場でもあった。そして、一般の学生が通う青山学院大学で、本当の福音に根差したキリスト教の花を咲かせたい。他の人が、福音に触れる姿を見つめていたい。そんな動機でこれまで福音宣教の現場で生かされてきたように思う。

序 カルチュラルフロンティアの神学

レスリー・ニュービギン(Lesslie Newbign, 1909~1998)は、40 年間インドで宣教師として奉仕したのち、1974 年、65 歳でイギリスに帰国し、都市の教会で牧会しながらセリー・オース大学で宣教学を講じ始め、1986 年 *Foolishness to the Greeks*『ギリシャ人には愚かなれど』を著した。その副題 *The Gospel and Western Culture* は、彼の問題意識をよく表しており、インドという福音宣教の現場で、現代の西洋文化こそ救われなければならないと感じたことを率直に表現している。これは西洋文化の影響力によってキリスト教を弁証しようとする姿勢と正反対で、欧米の神学者に少なからず衝撃を与えた。『ギリシャ人には愚かなれど』のテーマは、「福音と『近代西洋文化』と呼ばれる物事の見方、生き方の総体とが、福音宣教の場でぶつかり合うこと」(9 頁)であり、それによって、私たちの意識を目覚めさせ、神学的スタンスを動揺させずにはおかないとしている。

文化の神学といえば、H・リチャード・ニーバーの「キリストと文化」や、パウル・ティリッヒの「文化の神学」が著名であるが、レスリー・ニュービギンは、彼らは気楽な学者の立場にとどまっていて、宣教の現場を知らないと批判する。そしてこの「文化の最前線に身を置いたことのない者」たち

の西洋の神学が、「福音の本質」と「文化的すり込み」を混同してきたと批判している (10頁)。

レスリー・ニュービギンは、自身の宣教師の経験をもとに、「文化的フロンティア(cultural frontier)」の立場を主張している。レスリー・ニュービギンの「カルチュラル・フロンティアとしての神学」とは、宗教社会学者ピーター・バーガーの「演繹型の神学」、「還元型の神学」、「帰納型の神学」という三つの神学的立場を用いて論じられていく。

まず演繹型の神学とは、カール・バルトの立場で、キリスト教の立場をただ大声で主張するだけとされる。それに対して還元型の神学は、近代文化をそのまま認めて、自分の立場をその中に発見するR ・ブルトマンの神学である。つまり、文化の側に生きる人々の主観的世界という私的空間に神学を還元していく主張である。

これらに対して「宣教最前線の神学」は、ピーター・バーガーの帰納的方法をとる。『天使のうわさ』(A Rumor of Angels)では、世俗文化の中に「超越のしるし」見るなら、「根源的信頼」や「ユーモア」という「飛び地」に聖なるものを指摘する。つまり、帰納的方法の神学は、諸学と同じ経験的な仕方で世俗文化を分析するが、その中に宗教経験があるというシュライアマハー以来続いている方法なのである。彼は、この帰納的方法を評価するが、「宣教最前線の神学」は、世俗文化の「信憑性の構造」を逆転する特徴をもつという。それは、ベーコンやガリレオ以降の近代の科学的世界観を検討しながら、そこからキリスト教を見る「還元主義的な立場」ではなく、「逆に、キリスト教の啓示からこの科学的世界観を見る」のである。そうすると、「帰納的方法の有効性と同時に限界をも表すことになる」(25頁)。つまり、この神学は、世俗文化の世界像と対話しながら人間経験に分け入り、しかも最終的にキリスト教の啓示つまり聖書のメッセージによって、世俗文化を評価するのである。別の言い方をすれば、ニュービギンの「宣教最前線の神学」は、相手の懐に飛び込んで行って、人々と共にそこで新しい福音の勝利を共有しようとするのである。「受肉の教え」に従うことであり、しかも究極的に十字架と復活によって文化を贖うことになる。

具体的には、『ギリシャ人には愚かなれど』において、近代自然科学のニュートン力学また量子力学と対話をこころみながら、近代自然科学の「信憑性の構造」に「パラダイム・シフト」のあることを見つけ、マイケル・ポラニーのいう「暗黙知」という全体像の前提を明らかにした。ニュービギンは、社会科学の世界にもわけ入り、啓蒙主義の自動機械のような世界像を前提にした政治経済学に欠陥をみつける。

同じように、スタンリー・ハワーワスは、世俗的正義論にわけ入り、二つの欠陥を説明している。第一にリベラルな政治学は正義を抽象的にしか語っていないと言う。それは、近代的個人主義を前提にしたロールズの立場を指して、ハワーワスの美徳の倫理学の立場から、正しく生きようと決意した人格の共同体が抜け落ちていると指摘する。さらに彼が重要視するのは、ラインホールド・ニーバーが「愛と正義の二元論」を展開したことに対する批判である。つまり、道徳的個人には愛が通じるが、集団と集団の関係については社会において強制力をともなう正義で対処するという主張への批判である。それは、世俗的正義論に従うだけで、社会で正義を主張する背後に安易に強制力や権力や暴力を是認する姿勢が見え隠れする。この正義観は、世俗的政治学と同じ仕方で社会をイメージするだけである。

それでは「善い秩序」としての正義を共同体論として展開していきたい。

1. アリストテレスの友情

アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』で三種類の友情を区別している。

第一の「有用性の友情」は、「有用のゆえにお互いを愛するひとびと」であり、「相手かたを相手かた自身に即して愛するのではなく、自己にとっての或る善が相手かたから与えられるかぎりにおいて相手かたを愛している」のである。つまり社会の卑近な関係で記すと、出世に役立つから上役についていくと考えるようなもの、これが有用性の

友情である。

第二に「快楽の友情」は、相手が自分を快適にしてくれるから関わる。「たとえば機知的なひとびとを愛しているのは、彼らが何らかかくかくの人物であるということのゆえではなくして、自分にとって彼らが快適だからにすぎない」。機知に富んだ人物が好ましく思われるが、往々にしてそういう人は、深い人間関係に進んでいかない。アリストテレスの言葉によれば、「愛する相手の『ひととなり(エートス)』のゆえではなく、かえって相手が有用であり快適であるかぎりにおいて愛している」。さらに「このような性質の愛は、それゆえ、解消しやすき愛である」となる。若者が「速やかに親しくなる反面、また速やかに親しくあることをやめる所以もここにある」。

この二つと異なって、美徳に基づいた友情(「完全な友情」)は、互いの人柄を尊敬して関わる。彼によれば、「究極的な性質の愛は、善きひとびと、つまり卓越性において類似したひとびとのあいだにおける愛」である。つまり、勇気ある人は勇気ある人を求め、類は類を呼ぶ。英雄は英雄と友情を分かち合う。また「友とは自己の鏡のようなもの」で、相手によって自分の状況がよく知らされる。したがって、友とは、妥協的存在ではなく、本音で自分の真実を知らせてくれる存在でなければならない。だからこそ、自己理解には、真実を告げてくれる友が必要なのである。まさに、「友は第二の自己」だと言われる。

ところが、アリストテレスは、友情でも支えられない「人生の空しさ」を知っていた。世界の悲劇を見る窓をもっていた (哲学者マーサ・ナスバウムの指摘)。つまり、彼は、病気や事故という幾つかの理由によって幸福から見離される場合を考えた。彼は、個人や共同体が努力すれば必ず報いられるとは限らないことを知っていた。だからこそ、アリストテレスは、注意深く幸福を脅かすものを遠ざけようとした。

確かに、美徳の友情は時間という激流の中で、持続の孤島をしばしつくることができる。しかしひとたび彼らの共有する美徳が全能でないことを認識するなら、彼らのうち誰かが島の海岸から荒波にさらわれないともかぎらない。高貴なひとは、逆境の時よりも、幸運の時に友人のいることを好む。なぜなら、友情の最もよい時は、互いの幸運や豊かさを味わう時だからである。逆にいえば、私たちは、友人を自分たちの痛みや苦悩の悪影響から守ろうとする。アリストテレスが想像しているのは、恐ろしい伝染病にかかった場合などである。ある善い人が伝染病になるなら、友人に見舞いに来て欲しいと言うだろうか。彼は、友人たちに助けを強いることになり、慰めや同情を求めてつらい時間を費やさせることになる。

ここに、アリストテレスは、友情や美徳を脅かす世界の悲劇をみる窓をもっていた。私たちは、ある程度、厳しい嵐にも比較的静かに耐えることができる。しかし、恐るべき不幸の痛手、たとえば重病で倒れるとか、全財産を失うなどによって、私たちが幸福を失うなら、美徳を共有していた友情は失われる。私たちは、不運が攻撃してくる世界に破れたなら、自分だけで苦しみと不幸を担わなければならない。別の言葉でいえば、アリストテレスにおいて、人間は、境遇によって限界がある。簡単に言えば、大変な苦悩に叩き落とされた人生は救いようがなくなる。苦しむ者はこのことを知り、幸福の島を離れるのが最大の友情となる。不幸にであった人は、英雄的に友人たちから手を離し、激流に身を任せる。私たちは、苦しみにストイックに耐えなければならない(アリストテレスの英雄のモデル)。その人は、助けを叫び求めるのではなく、高貴にも黙って消えていかなければならないのである。

2. 神学的視点における友情

アリストテレスの完全な友情が苦しみから互いに友を遠ざけなければならない点は、聖書の友情の理解と正反対である。旧約聖書の民とイエスの出来事において私たちに近づかれた神は、痛みと苦悩に参加し、それを癒す愛を持っていた。十字架の苦しみを担ったキリストの友となるなら、私たちは、友人の痛みや不幸を排除したり、苦しみや不幸の共有を遠ざけたりするような友情を受け入れるわけにはいかない。

キリスト者の「完全な友情」に関する叙述は、ヨハネによる福音書「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」(ヨハネ15:7-17)」と主イエスが教えた言葉であろう。そして、私たちは、主イエスがこの世で彼の生を継続するようにと考えた「新しい共同体」に到達する。この共同体における友情は、神が私たちを愛したことに似ていると規定される点で特別である。新約聖書は、私たちが神の愛を学ぶとき、はじめて互いに愛することができると言う。私たちは、その神の愛を知るだけでなく、それに参加し、それに応答するようになる。これが、キリスト者が旧約聖書の歴史から学び、新約聖書と教会において語り継いでいる物語である。主イエスにおける神の愛は、私たちの所にまでくだり謙虚になった。これがキリスト教的友情の重要な出発点となっている。

フィリピの信徒への手紙にも鍵になる言葉がある。「そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。・・・キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」(2:1-8)

「へりくだり」と「無にする」とがきわめて特徴的であり、アリストテレスが主張した美徳の卓越性にはない。アリストテレスにおいて、友情という美徳は、その参加者の間に類似性を増やしていくことによって、それをもたない他者あるいはその美徳を共有しない他者との間に距離を置く。ところが、この「謙遜」は、キリストの中に人間を「友とする」神を見せる。神から人間へ、さらに苦しみと死へ、という二つの謙虚を示している。

神は、私たちを友とすることによって、私たちの苦しみを癒し、私たちの痛みを自分のものとされた。「わたしが愛したように愛しなさい」という命令は、弟子たちが癒しの愛を受け、友と共に苦しみ、友を不幸から癒すことができると主張されている。

キリスト者は、苦しみ死んだ救い主の物語を語るため、友情の限界に規定されない。なぜなら、死に至った同じ主イエスが甦ったからである。私たちは友のために苦しむべきであり、ヨハネによる福音書によれば、それは、偉大な愛のしるしである。さらに重要なことは、キリスト者が他者と苦しみを共有できるひとびとになることである。

東日本大震災の折、奥田知志牧師は「復興のメタノイア」と語っている。隣人に寄り添い耳を傾ける「悔い改め(メタノイア)がなければ復興はならない。何がやりたいのかではない」のである。

またキリスト者は、友人を賜物と見るだけでなく、友情も賜物として見る。友人は神が作者である物語の登場人物として自分たちを理解する。キリスト者としての友情は、個人であれ共同体であれ、自分自身の意志による行為で保たれるのでなく、むしろ、私たちと他者が互いを真実にしていく「善い秩序」の活動に参加することによる。この課題は、主イエスの生によって可能にされた、「新しい生命の道」に参加することに他ならない。神はその登場人物として私たちを必要としているのである。

3. 友情の脆さと十字架の愛

現代の女性哲学者ナスバウムは、古代ギリシャの悲劇作家ユーリピデスの『ヘクバ』の「内的悲劇性」という問題を提起した。ナスバウムの指摘する脆さとは、愛が転じて嫉妬になるような「悪しき落し穴」である。ユーリピデスの『メディア』では、「愛は自己の中の落し穴である」。私たちが自分の命をそこにかける「愛」は、愛そのものと愛する人を破滅させる可能性が常にある。

『メディア』は、男に尽くした女が裏切られた時、自分の主人と愛人を毒殺して、自分と夫の間に生まれた夫に似た二人の子も殺してしまう激しい

行動を記している。しかもこの悲劇は、復讐をセンセイショナルに書き立てるのではなく、このメディアの行為を「潔いもの」として記す。ここに理性を超えた静かな正義感が観客を悲劇的な感情に満たしていく。

『ヘクバ』は、トロイアの年老いた王妃であり、ギリシャ軍によって娘を殺されてしまう。戦争という集団と集団のぶつかり合いの中で、個人の幸せが踏みつぶされる悲劇を描いている。アテネとの戦争の時、隣国トラキアの王ポリュメストルに一人息子を戦難から逃れさせるために預け、養育の財産もつけた。息子だけが老王妃の頼みの綱、最後の希望、生きる拠り所だったからである。ところが、敗戦と同時にヘクバに届いた情報は、ポリュメストルが財産に目が眩み、たった一人のヘクバの息子を殺害し海に捨ててしまった事実であった。怒りに狂ったヘクバは、ポリュメストルの子供たちを殺害し、わが子を殺して財産を奪った男の両目を留め金で突き刺して盲目にしてしまう。

この陰惨な悲劇には、ポリュメストルの貪欲の愚かさとヘクバの激烈な悲しみや憎悪が見事に描かれている。「メディア」において人間関係は、暴力を爆発させる。「ヘクバ」において信頼関係は裏切られ、逃れようもない仕方で裏切り者ポリメストルを暴力的破滅に導く。この二つは、ナスバウムの指摘するギリシャ悲劇のもつ「脆さ」を示している。ヘクバとメディアの愛は、新しい種類の脆さを作る。なぜなら、愛による人間世界を破壊させるのが、逆転してしまった愛そのものだからである。この愛の逆転は、気紛れな外的世界からでなく、愛し信じると同時に憎み復讐しようと考える人間の魂の深みから生まれる。魂に潜んでいる「暗さや樽猛さ」から生じる爆発である。この「内的悲劇性」に対してキリスト教はどのような友情を語るのであろうか。

4. 脆さの克服とキリスト教共同体

キリスト者とは、共同体のキリスト者である(a Christian in the Church)。友人の共同体を離れて、キリスト者になる道を知らない。

キリスト教的友情には二つ特徴がある。第一に、見知らぬ者(a stranger)に目を向けることであり、第二にイエス・キリストの十字架の出来事、神が人間の脆さと悲劇性に参加してそれを克服した出来事、イスカリオテのユダに裏切られて十字架につけられ、なおも復活して弟子たちを赦された出来事である。

第一に、キリスト教共同体は、見知らぬ者をもてなす。神学者トーマス・オグレットリーは「見知らぬ者をもてなすことは、私たちの生活世界に新しい不慣れなよく分からない人を歓迎することであり、私たちの狭い局地的な世界を開く可能性の発見である」と記す。少なくとも弟子たちの共同体は、子どもや遊女やサマリヤ人を歓迎し、キリストに倣うように命じた友情から学んでいた。

第二に、イエス・キリストの出来事とは、神が人間の脆さと悲劇性に参加され、さらにそれを克服されたことである。ナスバウムがギリシャ悲劇に見出した脆さは、究極的に「内的悲劇」に基づく脆さであり、私たちの最大の愛に破壊的な暗黒の側面があり、時と場合によって爆発する。『ヘクバ』の幸福な物語は、たちまち悲劇に変わり、愛の変化は最終的に破滅となる。それゆえアリストテレスは、この愛から距離を置き、彼が友情と名付けた、より安定して安全な関係を主張した。これが悲劇に遭った者がひとり黙って英雄的に去る島である。

しかし、キリスト者は、彼らが真実の愛と呼ぶ愛を知っているため、このような「内的悲劇」を克服する。イエスは、裏切るユダの攻撃性を受け止め、さらに報復しようとする弟子たちの暴力的反撃を抑えたからである。神の愛は、復讐という「悲劇的要素」も受け止め、イエス・キリストの十字架による赦しの愛によって新しい人間を創造する。

キリスト教的友情は、ナスバウムの脆さを共有しつつ、次の三つの点で克服する。第一に、聖書は、「地とそこに満ちるもの 世界とそこに住むものは、主のもの」(詩篇 2:1)と語っており、その読者は、この神の性格と約束また彼の創造意志について、世界を救う愛を知ることになる。私たちは、世界が悲劇的な仕方で歪められ、目の前で破壊される可能性を知るが、聖書の読者は、世界が

恵みの神の被造物であり、悲劇が最終的世界でないことを知っている。聖書は「善の脆さ」を主張するが、同時に神の愛による「克服」をも語るのである。

第二に、キリスト者は、諦めの同情よりも「共に苦しむこと」を選ぶ。神は、被造物である人間の遠くにいてただ哀れむのではなく、イエス・キリストにおいて脆く悲劇の起こる人間の世界に入り、当時の権力者たちの手で殺された。十字架とは神の「脆さと悲劇性」への参加である。この十字架においてイエス・キリストは人々を赦した。これは復活の勝利を前にして、既に悲劇の中で勝利したと言うべきである。神学者ラインホールド・ニーバーが言うように、「キリスト教は、悲劇を越えた宗教である。涙は、死と共に勝利にのまれてしまった。十字架は、悲劇ではなく、悲劇の解決である。そこでは苦しみが神の生命に入れられ、克服された。それは、まさに救いの土台である」。したがって、悲劇的な要素への克服を語るのである。

第三に、ナスバウムのヘクバ論では、悲劇は、ヘクバが命を賭けた強い愛に裏切りが内在することで引き起こされる。愛の構造それ自身である。だがこれは、聖書もすでに知っている悲惨な姿である。弟子であるイスカリオテのユダが主イエスを裏切ったからである。

しかし神は、たとえその契約の相手が信頼できなくても、全面的に信頼を示す方である。アリストテレスの友情は、暴力的な復讐心という深みの認識に欠け、その友情関係には信頼と愛が裏切られることから逃避する側面がある。これに対して、キリスト教のもつ十字架の物語は、十二分に人間の攻撃性を描きつつ、それを克服するキリストの愛が記される。ここに歴史的現実の深みから生じる救いと希望の出来事があるのである。

5. 福音的正義論

2011 年にハワーワスは、「イエス・神の正義」(Jesus, the Justice of God)で、聖書に記されたイエス・キリストの言葉と生涯に神の正義が現れていると主張している。さもないと、ハワーワスに学んだ神学者ダニエル・ベルの言葉では、「礼拝の席から立ち上がり、ステンド・グラスの光に照らされた会衆の姿から、一転して礼拝堂を後にして、社会で正義を実行しようとする」逸脱行為となる。動機づけにはキリスト教信仰が関わっても、行動原理に世俗的正義論を用いることになる。しかし、「イエス・神の正義」は、世俗的正義論に適応するリベラリズムではなく、聖書の物語を生かした正義論である。イエス・キリストの言葉と生涯に、旧約聖書と初代教会に現れた神の正義を生かした正義論となる。また、出エジプトの解放の出来事を新しい共同体の形成とする旧約聖書の預言者的正義論であり、イエス・キリストの救いの出来事を「正義の回復」として解釈する正義論である。つまり、預言者は、民族を超えた「和解の共同体」を「狼は小羊と共に宿り 豹は子山羊と共に伏す」(イザヤ 11:6)というイメージとして終末論的希望として提供した。また主イエスは、「主がわたしを遣わされたのは、とらわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」(ルカ 4:18)と、ヨベルの年のイメージを実現したのである。

ウイリアム・スポーンの『聖書とキリスト教倫理』には、「アテネの哲学者とイスラエルの預言者とが異なるのは、知性の高低ではなく、想像力やヴィジョンの違いに基づいている」とある。これは、キケロの「各人のものを各人に」という個人主義的配分を土台とした世俗的正義論とは基本的に異なり、「キリスト論的正義」は、「神において全ての人びとの共生(the communion of all in God)が回復され革新される」「神の贖罪的連帯」を意味する。ハワーワスによるなら、これはトマス・アクィナスの神との友情、人々との友情を目的とした贖罪の聖書的プロットである。あるいは贖罪の聖書的ドラマである。したがって、この正義の反映は、孤児、寡婦、外国人労働者への愛というヴィジョンを含んだ和解の共同体の回復となる。「平和の秩序」に参加する正義、あるいはそれを目標にする正義である。正義とは、個人の配分を土台にする議論ではなく、「善い共同体」あるいは孤立や罪から「回復された共同体」を求めるものである。

TMRIからのお知らせ

◇冬季フォーラム

・2月27日に冬季フォーラムが開催されました。講師に東方敬信師（青山学院大学教授、日本基督教団教務教師）を迎え、「平和の共同体―その正義と福音」をテーマに良き研鑽のときを持ち、宣教へのチャレンジを受けました。その充実した内容の一端をこの所報にてご覧になれます。

◇シンポジウム後援

・「日本大震災国際神学シンポジウム」（東日本大震災救援キリスト者連絡会、聖学院大学総合研究所、東京基督教大学主催、フラー神学校共催／TMRI も後援団体として参加）が3月23日に開催され、夏季学校講師にお招きしたグレン・スタッセン師を始め国内外の6名の講師による貴重な発表が行われ、日本における「支援と宣教」に示唆に富む問題提起がなされました。

◇2012年夏季学校

・今年度は 6 月 25 日（月）～27 日（水）に夏季学校が開催されます。講師はローザンヌ世界宣教会議の神学委員長でケープタウン決意表明の文書責任者である、クリストファー・ライト氏です。主題は「神の言を神の世界へ―聖書全巻と福音宣教」（チラシをご覧ください）

献 金 者 名

＊団体および個人献金者名（理事分担金含む）
2011.10.13~2012.3.31

◇団体： 長谷聖書集会、練馬神の教会、下山口教会、タフマック、標茶キリスト教会

◇個人： 小関譲治、安久津政人、蔡孝全、飯島延浩、島田恒、渕上行道、田中綏子、高橋睦子、小林重昭、水間照弥、金本悟、西岡義行、中川美弥子 （順不同 敬称略）

・献げて下さった方々および団体に心から感謝いたします。

◇◇◇◇◇◇◇ 東京ミッション研究所選書シリーズ ◇◇◇◇◇◇◇

1『**天皇制の検証**―日本宣教における不可避な課題』ロバート・リー編 新教出版社 1700→1400 円
2『**これからの日本の宣教**―発想の大転換』TMRI 編 いのちのことば社 2200→1500 円
3『**宣教のパラダイム転換**上・聖書の時代から宗教改革まで』D. ボッシュ著 7035→6000 円
4『**宣教のパラダイム転換**下・啓蒙主義から21世紀に向けて』D. ボッシュ著 7875→7000 円
TMRI 訳 新教出版社（上 7035 円、下 7875 円 上下一括割引 14910→12500 円
5『**日本と西洋キリスト教**―文明の衝突を超えて』ロバート・リー著 TMRI訳 2940→2400 円
6『**＜聖＞をめざす旅**』アラン・クライダー著 棚瀬多喜雄訳 東京ミッション研究所 3150→2500 円
7『**社会を動かす礼拝共同体**』J. H. ヨーダー著 矢口以文・矢口洋生・西岡訳 TMRI 2940→2500 円
8『**愛する者が襲われたら**』J. H. ヨーダー著 棚瀬多喜雄訳 TMRI 2100→1700 円
9『**赦し**―新しい人間関係を生み出す』D.アウグスバーガー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 2100→1700 円
10『**イエスの平和を生きる**―激動の時代に読む山上の説教』グレン・スタッセン、デービッド・P・ガッシー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 2100→1700 円
11『**平和の契約**―福音の聖書神学的理解』ウィラード・スワートリー著 東京ミッション研究所訳 いのちのことば社 特別価格 7140→5000 円（まとめて買うとさらに割引が可能です。）
12『**敵対から共生へ**―平和づくりの実践ガイド』ジョン・ポール・レデラック著（水野節子・宮崎誉共訳、解説・片野淳彦、西岡義行）東京ミッション研究所／ヨベル社 1050 円 → 800 円
13『**ジョン・H・ヨーダーの神学**―平和をつくり出す小羊の戦い』ヨーダー研究会（中島真実、矢口洋生、藤原淳賀、マーク・ネイション）東京ミッション研究所／新教出版社 1950 円→1700 円
★『**ケープタウン決意表明**』日本ローザンヌ委員会訳、いのちのことば社 945 円